

あか毛和牛が初の枝肉共励会、トップは神内ファーム3002円

一般社団法人全日本あか毛和牛協会は4日、東京都港区の品川プリンスホテルで、同協会が定めた「あか毛和牛(褐毛和種)」独自の評価基準を初めて適用する「平成24年度あか毛和牛認定農場枝肉共励会」の前夜祭を開催した。穴見盛雄理事長は「本日をあか牛の夜明けだと思っている。あか牛の95%は2〜3等級。昨年11月にサシを重視するこれまでの格付とは異なる独自の基準を設定した。アンケートでも赤身肉を食いたい消費者は多い。首都圏からあか牛の販売を推進し、和牛の一つとして生き残れる最大限の努力をする」とあいさつ。続いて中央畜産会の菱沼毅副会長が「牛を黒牛に近づけるのではなく、あか牛としての価値観を打ち出していることに敬意を評したい。今後はきつちりとラベルを張り、牛の特長を打ち出す必要がある」とエールを贈った。翌5日の共励会には、東京食肉市場に熊本県、北海道、宮城県から29頭(雌6頭、去勢23頭)が出品。最優秀賞にあたる特別推奨牛に選ばれた北海道浦臼町・神内ファーム21の雌牛を、単価3002円でスターゼンミートプロセッサ(株)が落札した。同牛は粗飼料割合30%以上で親子放牧により育成された評価基準「星3」。「あか毛和牛にふさわしい飼育方法で生産されている。また24カ月で格付A3、枝肉重量508kg、ロース芯面積が70cm²と産肉性も高い」点が評価された。そのほか推奨牛は次のとおり。▽熊本県菊池市・岩根孝明(去勢、548kg、1705円)▽南阿蘇村・後藤春雄(去勢、579kg、1685円)▽高森町・杉田年徳(雌、515kg、1702円)。3頭はすべて格付けA3、(株)ミートコンパニオンが落札した。出品牛は全頭、水質やアンモニア成分、飼育密度などの飼育基準を満たした認定農場で生産され、国産粗飼料の給与割合、放牧の仕方などで、星ゼロから星3まで、4つのクラスを設けている。

褐毛和種の肥育頭数1万1千頭余、熊本、高知、北海道で8割超

農水省の「家畜改良関係資料」によると、褐毛和種の肥育頭数(平成22年2月1日現在)は1万1035頭、このうち①熊本6747頭(シェア61%)②高知1461頭(同13%)③北海道903頭(同8%)で、この3道県で83%を占める。以下、徳島518頭、福岡484頭、長崎484頭などが続く。全国的な普及活動に取り組む全日本あか毛和牛協会によると、農家数は現在熊本県34戸、北海道13戸、宮城県2戸と全国で49戸が登録され、飼育頭数は約2500頭(年1800頭を出荷)、他の主力産地に呼びかけ年内に飼育規模で3千頭体制を目指している。同協会が策定の評価基準は、協会認定登録農家の出荷牛を対象に一定の出荷月齢と枝肉重量を前提に星の数で4段階の評価。具体的には、肉質基準の割合が70%以上と高いことや「BMS No.2〜4」と、黒毛和牛に比べ脂肪交雑の少なさにウエイトを置き、さらに親牛の哺乳で育てたか、粗飼料の給与割合や放牧の有無など環境負荷の程度や動物福祉への観点も盛り込み、自然に近い育て方を重視しているのが特徴である。